

## 2017 年度フィールド実習(国内) 「北の大地で人と自然をまなぶ」 北海道実習報告

### 1. 「フィールド実習(国内)」の性格と目的

新しい人間文化学科の「フィールド実習(国内)」は、カリキュラム・ポリシーにある「全学年を対象とする学外実習科目(国内・海外)」のひとつとして設定されたもので、以前の間人文化学科でゼミごとに行われていた研修旅行とは性格を異にする。国内の一定地域を対象に様々な学問分野の立場から調査、考察を行い、ディプロマ・ポリシーにある「人間が育んできた歴史や文化について総合的な教養を身につけ」ることを目的としている。

### 2. フィールド設定と二つの視点

2017 年度は北海道内をフィールドとして、主として道南・道央地域を中心に実習を行った。北の大地の風土とそこに住む人々の生活と文化について、

「先住民族としてのアイヌ民族」

「中央政権から離れた地域の和人(日本人)」

という二つの視点から、現地の博物館、美術館等で学習・調査を行い、また現地の方々と触れあう機会を多く持てるように計画を立てた。これによって奈良や京都、江戸や東京を中心とした視点ではとらえきれない日本の歴史・文化の多様な側面を、現地を実際に見て体験することにより深く理解することができると考えた。

### 3. 実習地・実習期間

実施に当たっては、対象となる北海道という地域の広大さと、1, 2 年生を中心とする旅行経験の少ない学生たちによる実習であるこ

とを考慮して、地域を道南・道央地域に限定し、期間を9月4日(月)から9月9日(土)までの5泊6日とした。国際文化学科で実施する海外実習にくらべて短期間ではあるが、言語や生活習慣が我が国と大きく異なる外国に比べて、現地の諸条件への適応に特段の努力を必要とはしない分、学習の能率は高いと考えられる。移動中の見聞を含めれば優に1単位分の学習量は得られるであろう。

当初の計画では、シラバスにあるように道南の松前と函館を訪れる予定であったが、参加希望者が7名にとどまったため貸切バスを使うことができず、松前行きを断念し、函館の計画も縮小せざるを得なかった。その代わり、白老と小樽でそれぞれ見学先を追加することとした。

仙台と北海道との往復には、往路に鉄道、復路に航空機を使用した。日程と移動手段は次のとおり。

9月4日(月):仙台→函館(新幹線、在来線)

9月5日(火):函館→白老→平取(ジャンボタクシー)

9月6日(水):平取→札幌(ジャンボタクシー)

9月7日(木):札幌市内(バス、地下鉄)同前

9月8日(金):札幌市内(同前)同前

9月9日(土):札幌→小樽(バス)→新千歳空港(JR 在来線)→仙台(飛行機)

### 4. 実習・見学先／学生の感想

日程的にはやや窮屈な部分もあったが、ほぼ予定どおりの行程を消化することができた。以下、学生たちの感想の一部を略記する。

#### ・特別史跡 五稜郭(函館市)

西洋の技術である星型の城と、日本の技術がみられる石垣など、和と洋の技術の取り入れがみられた。

#### ・伝統的建造物 旧相馬邸(函館市)

歴史的財産を残そうとしている館長の東出伸司さんの想いを聞いて、今残されている財産の数々は、様々な人の手によって現代に伝えられているということを実感した。

#### ・白老町立アイヌ民族博物館(白老町)

アイヌの人たちに墓参りの習慣がないと知り驚いたが、先祖を蔑ろにするのではなく供養する場所があり祭の時に供物を捧げると聞いて、アイヌの人たちにとって先祖は神様みたいなものだと思った。

アイヌの暮らしや考え方を現在に伝えよう、広めようとしている学芸員や施設の方々の情熱や努力を感じることができた。

#### ・仙台藩白老元陣屋跡(白老町)

そもそも北海道に仙台に関するものがあるということに驚いた。北海道を管理していたのは松前藩だけと習っていたので、…親や親戚に教えなければならないと思った。

白老の方々が守ってくださった元陣屋跡をより多くの人々に知っていただけるように私も微力ながら尽くそうと思った。

#### ・平取町立アイヌ文化博物館(平取町)

アイヌ語講座を担当された関根健司さんの「僕自身はアイヌではないが、アイヌの立場を代弁する者として発信を続けていく」という言葉が心に残った。

アイヌの刺繍体験は、大変苦勞した。当時のアイヌの女性にとっては日常の一部だったかもしれないが、慣れない自分はこれを毎日続けるのは考えられず、体験することの重要さをひしひしと感じた。

#### ・北海道博物館(札幌市)

アイヌのイメージが覆された。熊や鹿など、昔の原始人のような狩猟だけで生きていたと思っていたが、和人と交易もしていたので驚

いた。中国とも交易していたと聞いたときはなおビックリした。

学芸員の太谷さんが、「アイヌの人々が我慢していた歴史を記録していく仕事が残っている」と仰っていたのがとても印象的だった。

#### ・北海道開拓の村(札幌市)

広大な土地を歩き周りながら、馬車の音や建物内の匂い、デザインのこだわりを見るなど感覚で楽しみ、体感することで北海道開拓の歴史を身近に感じることができた。

ボランティアの活動率が高いことに驚いた。地域の方々とも一緒になって支えている博物館であることがわかった。

#### ・北海道大学植物園(札幌市)

まるで森をそのまま切り取ったかのような広大な自然に思わず時間を忘れて見入ってしまった。設立当初の形を残している博物館は、他の博物館とは大きく異なっていて、…博物館そのものも、時代と共に進歩してきたのだと改めて感じた。

#### ・北海道大学総合博物館(札幌市)

大学内に博物館や美術館があることで、学生の博物館に対する意識、関心の向上、また地域に身近で親しまれる大学となるのではないかと考えさせられた。

#### ・北海道立近代美術館(札幌市)

ボランティアの方々の解説を交えて作品を鑑賞することで、一人で鑑賞する時よりも作品の捉え方に広がりを持つことができた。静かに作品を鑑賞することもひとつの楽しみ方ではあるが、誰かと作品の捉え方を比べてみることで新たな発見が生まれ、より違った角度で作品と向き合えるかもしれないと思った。

#### ・北海道立三岸好太郎美術館(札幌市)

三岸の作品は生涯を通して変化を続け

ていることが改めて分かり、独学だからその柔軟性が彼には備わっていたのではないか…自分をより良く変えることに貪欲で、そのためならプライドも捨てることの出来る広い心があるものと感じ、私もその精神を見習って勉強や精神面など自分を磨くことに貪欲でありたいと思った。

#### ・小樽市総合博物館(小樽市)

本館と運河館という二つの館の成り立ちそのものが、小樽市が辿ってきた平坦ではない道筋を象徴しているようだった。

急激な繁栄から現在は人口が減少する一方であるとうかがい、小樽は観光で賑わっていると思っていたため小樽市の抱える衰退の現状に驚いた。

#### ・小樽市練御殿(小樽市)

(都合で短時間の見学にとどまった。)

#### ・ザ・グラススタジオ・イン・オタル(小樽市)

浅原千代治さんの「技術は師匠から弟子へと伝達することができるが、感性はその人自身の生活の中で五感で得たものが反映されるため、他人に教えることはできない」という言葉が印象的だった。

### 5. 全体を通しての成果

ほぼ半年にわたる準備学習と実際の旅行を経て、学生たちは確実に一回り大きく成長した。総括レポートから拾ってみよう。

まずは異文化とのふれあいの体験である。

「アイヌの方にお話を伺うまで自身がアイヌであることに負い目を感じているのではないかと、…不安であったが、アイヌであることがうれしい、学んでくれてうれしいと言ってくれる方がおられ、自分がアイヌ文化について学ぶことができることに喜びを感じた。」

さらにこの体験を広め伝える責任の自覚が

生まれつつある。

「(アイヌ)文化の継承に奮闘し、試行錯誤しながら活動している方々にも出会い、…そのお姿を拝見し、自分には何が出来るだろうとも考えさせられ、得た知識を自分だけのものにするのではなく、発信していくこと、語り部になることで、これからの未来に少しでも貢献できるのではないかと思った。」

さらに文化の継承の重要性と困難さが同時に見えてきた。

「生活用具など『もの』を残すことは誰でもできる。しかし『もの』を正しく扱うこと、その地の言葉を話すことといった技術的な面は人を通して人に継承するしかない。つまり、文化継承には、遺跡の保存だけではなく人と人を繋ぐということが非常に大切なのである。」

また、見学した施設、機関で働く学芸員やボランティアの存在にも関心が深まった。

「館長さんが、学芸員の仕事について『子どものぼかんと口を開けた顔が見たいから仕事をする』と言われたのが印象的だった。学芸員という仕事に対するイメージが変わった。」

「予想していたよりも多くのボランティアやスタッフの方が館内を歩き回っており、…一人一人のモチベーションの高さの根底には、この地が生み出した三岸という画家への愛着とリスペクトがあるのではないかと想像させられた。」

### 6. 反省点と今後の展望

準備期間が短く、現地の人々とくに同世代のアイヌの人たちとの交流が図れなかったことが悔やまれる。

計画の提示が4月に入ってからだったため、旅費の工面の目途が立たず参加を断念した学生がいた。在学生に対しては遅く

とも1月中に告知して説明会を行い、新入生に対してはオリエンテーションキャンプの中で周知する必要があるだろう。

さらに、実習終了後、適当な時期に報告

会を開催することや、報告集を作成することにより、年間を通した活動としていくことも可能であろう。

(担当教員：井上研一郎)



アイヌ民族博物館



北海道立近代美術館



仙台藩白老元陣屋跡



小樽市総合博物館本館



北海道開拓の村



ザ・ガラススタジオ・イン・オタル